

「イギリスを通して見る日本の研究環境について」

はじめに ロンドン大学(University College London: UCL)について

UCLは、1826年にケンブリッジ大学やオックスフォード大学の次にできたイギリスで3番目の大学です。一般にロンドン大学(University of London: UL)は、UCLやキングズ・カレッジとかインペリアル・カレッジ等の数多くのカレッジから構成される大学群のようなものです。キングズ・カレッジとかインペリアル・カレッジ等は後からできたもので、UCLすなわちユニバーシティ・カレッジが、oldest and bestだと言われているそうです。私の住むフラットの前にある公園には、広島原爆の犠牲者を追悼するためこの町に贈られた八重桜があり、私が着いた頃には満開でした。この公園のど真ん中には、ガンジーの像があり、彼はUCLに留学していたとの事です。そのため、この地は、ベジタリアン発祥の地でもあるそうです。またこの公園の片隅にはイギリスで最初の女医さんの像もあり、その女性がUCLに最初に入学を許された女性だそうで、ウーマン・リブ発祥の地でもあるとのことでした。しかもUCLは、最初に女子学生を受け入れた大学との事でした。オックスブリッジ(オックスフォード大学やケンブリッジ大学)は女子学生を近年まで受け入れていなかったそうです。但し、近年といっても日本の感覚よりも昔のことで第二次大戦前には、既に女子学生も受け入れていたようです。(この国では、100年単位で物事を考えるようです。大学の歴史自体、日本の旧帝大等と比べてもずっと長いのですから。)オックスブリッジというのは、元々、人種差別などが厳しく、良家の子供しか受け入れていなかったのに対し、UCLは創立当初からリベラルな大学だったようです。これはある意味で、当時の政府にとっても、脅威だったとのことです。また、UCLに漱石が最初の政府交換留学生として留学していたことがわかりました。しかもこのUCLがあるGower Streetに、最初の下宿を構えていたそうです。更に、UCLには、伊藤博文や井上馨などの長州のグループや、五代友厚(大阪の有名な財界人で商工会議所を設立)、森有礼(昔の文部大臣)のような薩摩のグループがその昔訪問したことがあるらしく、その記念碑があります。かなり日本の歴史とも深い関係がある大学です。

また、私が今研究している研究室のある建物はダーウィン・ビルディングと呼ばれていて、「種の起源」のダーウィンがかつて住んでいたそうです。また、「DNAの二重らせん」で有名なフランシス・クリックも、うちの学部ではありませんが、UCLの卒業生だそうです。さらにUCLに隣接しているバークベック・カレッジでは、ワトソンの「二重らせん」に「ロージ」として登場するロザリンド・フランクリンも研究していたそうです。「ロザリンド・フランクリンと二重らせん」というKlug教授(この先生は、電子顕微鏡を用いて生物学的な研究をして、ノーベル賞を取られたそうです)のトークも聞きました。そのバークベック・カレッジでは、ロザリンド・フランクリンとKlug教授も研究していた時期があったとか。生物学、分子生物学の歴史に関して面白い所ですね。この地で研究をできることは、本当に喜ばしいことだと思っています。更に、エーザイの研究所もUCLの中に作られているようです。イギリスの大学では、企業が研究所を作ってお金を落としていることが多いようで、日本企業は特にその点に関しては多いに貢献しているようです。

イギリス及び日本における女性科学者、ワーキングウーマンの環境について

まず、私が女性であることと生化学若手は女性の会員が多いという点から、女性問題について述べます。上記のように女子学生を最初に受け入れた大学だけあって、女性研究者が多いのに非常に驚かされてしまいました。私の上司であるジャネットもその一人です。イギリスでは教授というのは非常に少なく日本では大学で言えば大学の学部長に匹敵する地位だという事でしたが、彼女はUCLだけでなくバークベック・カレッジという隣接するロンドン大学のカレッジとEuropean Bioinformatics Institute (EBI) (ドイツのハイデルベルグにあるEuropean Molecular Biology Laboratory (EMBL)の下部組織で、最近ハイデルベルグからケンブリッジに移ってきた組織)にも兼任でポストがあり、とても影響力があるようです。彼女が抱えている学生やポスドクの数の多いこと。また、生化学、分子生物学の分野でしかも上司が女性となれば、女性が集まるのも無理はないのですが、それにしても多くて、2人に1人は女性というのは、日本では考えられない状況です。東大薬学部でもこんなには女性がいなかったのと思っています。しかも女性の方がバリバリ仕事をしているようで、我々の分野で個室を持って独立しているのは、ジャネットを含め3人も女性で、あとは皆、大部屋で雑居状態です。グループ全体で独立しているのは、2人の教授

を含め7名ですが、そのうち4人が女性で、2人の教授も1人が女性であるジャネットで、半分以上が女性なのです。UCLでは、女性教授の数も他の大学より多いと聞かされました。また、私が一緒に仕事をしている研究者も女性で、ゲイルという方ですが、彼女は小さいお子さんが2人いてフル・タイムでは働けないので、月曜日から水曜日だけ研究室に来ていて、その3日間はベビーシッターにお子さんを預けているようです。旦那さんも彼女が働くのを認めてくれているそうです。ゲイルによれば、子育てもしたいし、かといって仕事も続けたいととのことでした。こうしたことが可能なのはイギリスならではののかなと思いましたが、パリのキューリー研究所でポストをされている生化学若手のOBの話では、キューリー研究所でも同様に女性が多いそうです。中には殆ど女性だけのグループがあるそうです。女性研究者の数と質では、日本の研究所が欧米などの先進国に後れを取っていることは明らかです。

イギリスは働く女性には本当に良い環境のようです。さすがサッチャーの国といったところでしょうか。研究室だけでなく、UCLの事務局も女性が多くて私が日本でコンタクトを取ったのは皆女性でしたし、私の家主であるジュリアもUCLの事務官でプロ意識が高くバリバリ仕事しているようです。一番、驚いたのは、先日フラットにジュリアの御主人のポールがいらして、「今週は彼女があまりに忙しすぎて面倒を見るできないから、代わりに来た」とおっしゃって、私を銀行に連れて行って下さいました。彼自身は、やはり近くのクリニックでソーシャル・ドクターをしているようで、患者が少ない時にいらして下さいました。英国の男性は女性がバリバリ働くことに理解があるだけでなくとても協力的なんだなと思って嬉しくなりました。英国では女性も結婚・出産があっても仕事をやめないとは話に聞いていましたが、ここまで違うとは思わなかったので本当にいい意味で驚いています。研究者、学生、秘書さんや事務等、ここにいる女性たちを見て限り、何かとっても遅しくてのびのび仕事をしているので、見ていて微笑ましくなりました。日本もこういう風になればいいのにと思いつつ、まだまだワーキング・ウーマンには発展途上国なんだなとつくづく実感してしまいました。

実際に、ボスのジャネットや同じくパーマnent・ポストについているクリスチンの話では、イギリスではもはや女性問題は問題でなくなっているそうです。クリスチンによれば、この国では10年ほど前に、マスコミなどで女性問題に関する論議が起こったそうです。その時以来、家庭における夫は変わって来たとのことでした。ただ、子供を育てることは確かに大変で、それが女性のキャリアに影響する事はある程度仕方がないことだそうです。それでも夫も妻もある程度手伝えることが当たり前になっているようです。特に、夫婦共に専門的な職業について、それなりに高いサラリーを受けている場合、大きな家に住んで、メアリー・ポピンズのような住み込みのベビーシッターを雇うのが当たり前のことのようにです。

日本人女性が大人しいと思われてしまうのも、納得がいくような気がします。去年の夏に、国際学会で私が最初にジャネットにお会いした時に、「日本人の女性がロンドンで一人で暮らすのは大変よ。とても自由だから。」と言われた訳が今になって分かったような気がします。この「自由だから大変」という言葉はとても奥が深いなと思います。恐らく、「自由」に必然的に付随する自立や自律の大変さを彼女は言わんとしたのでしょう。どれだけ今の日本女性に自立や自律の大変さを乗り越えられる人がいるのでしょうか。これも子供の頃からの周囲の教育環境によって変わってしまうものだと思います。ただ色々な方の話を聞いた限りでは、イギリスのこうした背景には、家庭において男性だけの収入では、暮らしていけないという現実もあるようです。特に子供がいる場合、教育費等にお金がかかるようで奥さんでも働かないとやっていけないようです。日本でも高度成長期の頃のように、定年までに初任給の何倍にも給与が倍増する時代は終わっているので、必然的に女性も外で働かなければいけない時代があと数年で来るのではないかと私は最近考えています。

さて、以上はイギリスにおけるワーキングウーマンの現状について書きましたが、実際に日本における現状はどうでしょうか。

最近、気がついたのですが、私の女性科学者を目指していた友人達は、何故だか皆、上司との人間関係が合わなくて、挫折感を味わっていました。結構、科学に憧れて、科学者を志していた人ほどそういう傾向が強く、単に上司と合わないがために、科学に幻滅を覚えて研究を辞めてしまう人たちが多かったことに気づきました。研究者に限らず、事務系の女性でも上司と合わず、仕

事が面白くないので辞めていく傾向もあるようでした。女性会員の方で思い当たる方はいらっしゃいませんか？私もかつて、上司と合わなくて辛い思いをしたこともあり、一時は研究そのものを辞めようかとも思ったこともありましたが、ただ、そういう場合、往々にして研究室を変えるなど環境が変わると状況が改善されることもあるようです。私の場合、「生化若手」等の友人も含め人間関係に恵まれていたため、何とかここまでやってこれました。まだ日本の研究室、職場では女子学生、女性を受け入れる土壌が出来ていないのでしょうか。事実、私が学部生だった頃、研究室配属で一つの研究室に女性が2人以上来ることを教授陣は嫌がった記憶があります。指導教官の方にも女子学生を指導しても、結婚、出産で辞めていくから教育に力を入れても仕方がないという意識があるのでしょうか。両者の意識が合わないがため、悪循環を生んでいるのではないのでしょうか。また女性の指導教官、スタッフが少ないことも女子学生が受け入れられ難い環境となっているのかもしれない。東大、京大等の旧帝大系の国立大学や早・慶などの有名私大で、女性の教官が少ないというのは、女性が高等教育を受けることに関しては、まだまだ日本が後進国だということを示しているのではないのでしょうか。私が所属していた東大・薬学部でも最近、客員教授だった女性の先生が、教授会で1票差で教授になれなると決まったようです。きっと欧米の大学だったら、何の問題もなく教授になれるだけの業績のある先生でしたが。

女性が大学院で学位を取得することに関して、家族の理解もなかなか得られないというケースも多いと聞きます。私の場合、幸い父が研究者だったので、むしろ大学院に進むことに協力的でした。実際に、私が東大に入学した際にクラスにいた女子学生6名のうち4名の父親が東大出身者でした。また、東大の女性の友人の親の職業は、会社の社長、重役、大学教授、裁判官、医者など、富裕であるかインテリである傾向が強いようでした。また、入学時に聞いた話ですが、東大の女子学生の親の平均収入は1000万円を超えて、男子学生の親の収入より多いということでした。こうした恵まれた家庭環境でもない限り、確かに女性が高等教育を受けるのは、今の日本ではかなり厳しいのでしょうか。

更に、パートナーとなる周りの男性の意識にもまだまだ問題があるようですね。このことは、男性会員の皆さんにも意識して頂かなければならない問題だと思います。私の知人で、別の分野ですが、やはり大学院の博士課程に所属していた女性は、かつて付き合っていた男性に「そんなに頑張らないで」と言われて、それが重荷になって別れてしまったようです。他にも、旦那さんだった人が結婚前と結婚後で言っていることが変わってしまって、離婚してしまった友人もいます。

このように女性を取り巻く環境が悪いということは、会社などに入っても同じことがいえるようです。最近、こちらで読んだ日本語の新聞によれば今年、男女雇用機会均等法が改正案が可決されたということでしたが、どこまで会社での女性の地位があがるのでしょうか。今回の改正案では、募集、採用、配置・昇進の男女差別を努力義務から禁止規定に格上げされ、差別是正勧告に従わない企業名の公表制度を導入するとその新聞には出ていました。私の同期の女性によれば、修士を卒業したにも関わらず、会社に入っても男性のサポートのような仕事だけで責任のある仕事をさせてもらえないという話でした。私は、こうしたことが逆に家庭環境、大学での教育環境にもフィードバックされて悪循環を生んでいると考えています。

イギリス及び日本における教育制度について：奨学金、授業料etc.

まず、イギリスにおける高等教育の制度についてですが、日本とかなり違います。大学は4年制でなく3年制です。しかも日本では、最初の2年程度は教養課程がありますが、そういうものがなくいきなり専門課程に入るようです。さらに大学院生のことをPh.D. Studentと呼んでいます。3年間で博士課程を修了させるようです。

日本で言う修士課程というものは、1年間で修了できるようですが、更に2年間研究すれば博士課程を修了させられるので、大抵は修士を取らずに博士課程を取ってしまうようです。従って、順調に行けば24、5歳で博士になれてしまうのです。これは、日本で博士課程に所属している会員の皆さんには羨ましい話ではありませんか？24、5歳で博士になった後は、数年ポスドクとして研究を続け、30歳前後で大学でしたらレクチャーというようなパーマネントの職を得るようです。やはり同じ研究をするなら、お給料をもらいながら研究を続けられる方が良いですね。但し、研究も経験を要するものなので、日本で博士課程修了後1年目の研究者と英国での博士課程修了後

1年目の研究者を比較した際に、実力はやはり日本の研究者の方が上のように見えます。しかしながら、同じ30歳前後になった時の実力を比較した際に、お給料をもらいながらプロ意識をもって数年間働いてきた英国のポスドクの実力は、決して劣っているように見えません。皆さんはどちらのシステムが良いと思いますか？

さて、問題の授業料に関してですが、1985年頃からサッチャー政権により、大学等の教育機関の授業料は年々上がってきたようです。現在、UK出身者の大学院の授業料がUCLでは日本円にして50万円位のように見えます。大学の方も、コースによって違うようですが、平均60万円と、国立にしては、日本と比べて若干高額ですね。しかもアジア諸国、日本からの留学生の場合、その3倍の授業料を支払わなければならないようです。これは、日本の一般的な私立大学よりも高いですね。余談ですが、1年程度のビジティング・アカデミックの場合も年間50万円程度の料金、カレッジ・フィーを支払わなければならないようです。私の場合、ポスドクにも関わらず年間50万円程度の料金、カレッジ・フィーを支払わなければならないと聞かされ納得がいかなかったので、日本を出る前にポスのジャネットにメールを何回か送って、「そんなに高いカレッジ・フィーは支払えない。」と交渉したら、彼女には「努力してみるが、どうなるか分からない。」と言われました。しかしながら、こちらに来てみると、UCLでHonorary Research Assistantという肩書きを頂くことになっていて、カレッジ・フィーを支払わなくても済むようになっていました。こちらでは、教授が動けば大抵のことは何とかできるようで、交渉した甲斐があったようです。どうも、イギリスでは主張すべきことを主張せず、イエスとしか言えない日本人は、「鴨ねぎ」にされてしまうのです(笑)大学の学部の授業料は、UK出身者の場合、親の年収によって授業料を支払わなくてもよいようです。ただし、日本の大学と違って、イギリスの大学は卒業することが難しく、入学時と卒業時の学生数はかなり違って聞きました。かなりシビアな状況のようで、ドロップアウトしてしまう学生が多いのです。それだけ学生が勉強に専念しないといけないようです。また奨学金を得た場合に、成績が下がると打ち切られてしまうので、アルバイトも基本的に禁止されているとも聞きました。上記のように大学院の場合、かなり高額の授業料なので、大抵の場合、奨学金、グラントを取れないと通うことができないようです。このグラントの出所ですが、1985年頃までは、大学そのものに政府からの支援があって、大学からグラントが取れたようですが、サッチャー政権によって打ち切られたようです。現在は一般企業(製薬会社など)、Welcome Trust、The Royal Societyのような財団法人やBritish Council、Medical Research Council(MRC)、Biotechnology and Biological Sciences Research Council(BBSRC)のような政府機関などのファンドからPh.D. Studentはグラントを得ているようで、私の研究室にいるPh.D. Student達はそれぞれ別の機関からグラントを得ているようです。このグラントの内訳ですが、単に住居費を含む生活費だけでなく、大学の授業料も含まれているのです。しかも、学位取得後に返還する必要はないようです。生活費についてですが、うちのPh.D. Studentの一人の話では、1月に700ポンド、日本円にして14万円程度ですが、住居、家やフラットなどを同じような学生達とシェアしたりして、贅沢をしなければ十分に暮らせる程度です。先日、掲示板に出ているあるグラントの給与にあたる生活費を見たところ、この10月からレートが上がるそうで、ロンドンでのPh.D. Studentの給与は、1年目が9千ポンド、3年目が1万ポンドと年々少しずつ上がるようです。但し、やはり成績が落ちると打ち切られるので、夏休みなどを除いてアルバイトはやはり禁止されているそうです。

但し、このグラントを得るにはかなり高倍率の競争に勝ち残らないと得られないようで、実際にうちの研究室にいる学生さん達を見ているとそれぞれ優秀なようです。でなければ、よほど親にお金がないと高等教育は受けられないのが現状のようです。あるいは、UCLにはそういう制度はないようですが、インペリアル・カレッジなど他のカレッジには働きながら学位を取るコースもあり、その場合、学位を取れるまでの期間は3年間ではなく、もっと長くなるようです。

この国では、優秀でやる気のある学生達に門戸が開かれているのは確かです。このように、現在、景気が好いといっても、日本に比べて予算が充分でないといわれているイギリスでも、優秀な学生にはこうしたグラントがあるのです。サッチャー政権で、研究、教育に対する予算が削られても、大学院生の奨学金などの観点からするとイギリスの方が良い政策を取っているように見えます。現在、労働党のトニー・ブレア首相の最大の関心事は、教育のようです。今のところ、初等、中等教育が彼の最大課題のようですが、いずれ高等教育にも目を向けるようになれば、現状も改善され更に良くなることでしょう。

次に日本での現状ですが、数年前に私がまだ博士課程の学生だった頃、国立大学の理 科系学部の授業料を文科系よりも高くするという話が持ち上がったことがありました。結局、立ち消えになったようですが、我々、大学院生の間では問題になった記憶があります。ただでさえ高い授業料を更に、文系より高くするなんてもっての外。これだから、理系に進みたいという学生数が減ってしまうのだと、当時怒りを覚えた記憶があります。日本でも年々、国立大学の授業料が値上がりして、私立大学との格差は小さくなっているようです。しかも授業料免除の資格が得られるのは、本当に親の年収が少ない極一部の学生だけでした。

また奨学金等の問題ですが、学振、ティーチング・アシスタント等が拡充されたとはいえ、全ての大学院生が恩恵を受けている訳ではないですよ。育英会の場合、確かに生活費を支えてはくれますが、現在のように高い授業料をも払えるほどの額ではないようです。しかも、就職する機関、組織によって返還しないといけけないのは、かなり問題だと思います。私の友人にも、学位取得後、育英会に返還するのに苦労している人もいます。利子が安いとはいえ、学位を取得するために多額の借金を作っているようなものですよ。これでは、文系のビジネスマンの生涯賃金との格差が大きくなってしまふのは当たり前で、既に20代の時点で大きな差が開いているのは明白です。私個人の意見かもしれませんが、科学者も科学者である前に一人の人間として生きるための、基本的な権利を持っているのです。科学者にとって科学を研究することが、経済活動なのです。確かに、ここ数年間、日本での科学技術振興費は年々増えています。ポスドクの就職先は増えていますが、そのポスドクの卵となる大学院生の生活状態は依然と芳しくないと思います。皆さんはどのようにお考えでしょうか？このシンポジウムを通して、考えて頂ければ幸いです。

イギリス及び日本における大学の研究室について：アカデミック・ポジションと学生の指導体制等

イギリスでは、上記でも述べましたが、大学における教授の数はとても少なく、日本で言えば学部長並みのようです。しかし、その下にいるパーマナント・ポジションのリーダー、レクチャーの数はかなり多いようです。これらのポストにいる研究者の財源は大学でなく、上記のMRC、BBSRCなど、大学外の組織からであることが多いようです。

我々のグループでは、60数人のメンバーがいて、6つの小さいグループに分かれています。これらのメンバーのうち7人がこうしたパーマナント・ポジションについて、そのうちの6名がこの小グループを率いているのです。残りのメンバーがポスドク、ビジティング・アカデミック、Ph.D. Studentとなっています。ポスドクの数も全体の6割と多いことから、教授やリーダー、レクチャー等が手取り足取り指導しなければいけないPh.D. Studentの数は、ここでは、17人程度と全体の3割以下と非常に少ないのです。即ちパーマナント・ポジションにいる指導者一人当たりの学生の数は、平均2、3人と少なく充実した指導体制が取れるようです。しかもPh.D. Studentには大抵一緒に仕事をするポスドクがついているので、かなり面倒見のよいシステムではないかと思われます。

私のボスである、ジャネットは非常に忙しい方ですが、研究室におられる時は絶えず誰かしらと打ち合わせをしたり、ポスドク、学生の指導をしているようです。私の場合も、彼女が研究室におられる時は週に1回はディスカッションの時間を設けて頂いてます。隣のグループを見ても、教授が研究室にしょっちゅう現れて、ポスドクなどと議論している様子が見られます。彼らの研究に対する情熱は見習わなければならないと思っています。

現在、日本の若手研究者は奴隷のように働かされていると思っています。こちらでは、夕方5時6時を過ぎると途端に人の数が減ります。だからといって、彼らが遊んでいる訳でもないのです。語学力の差もあって論文の読み書きの速さも違うのか、彼らの方が効率よく仕事をしている気がします。また、日本のとある学会発表で、有名な先生の研究室の発表でのことです。学生さん達が次から次へと発表していましたが、質問の際に答えられないと、その先生が立って援護していました。本当に教育する気持ちがあったら、少々大変でも学生さん自身に答えさせるのではないのでしょうか。どうも学生さん達は、実験するために歯車のように働いている印象がありました。その際に、教授陣は実験はさせるけれど、学生が考える能力をつけるためのディスカッションが、研究室内でちゃんと行われているのか疑問でした。また、私がUCLに来て、良かったなと思っていることの一つは、何といっても雑用が減りました。使っている研究費が少ないということもあるのです。

ようが、ポスドクなどの若手の研究員が数多い報告書、出席しなくてはならない委員会等で、研究する時間を削る雑事は少ないようです。日本に居た際の研究プロジェクトでは、通産省の大きな予算がつくプロジェクトということもあって、非常に雑用が多かった記憶があります。今の日本では科学技術基本法のように科学を発展させるための法律なども整って、国家予算における科学技術研究費も増大しつつありますが、まだ若くて優秀な研究者を育てる環境が整っていないのではというのが私の個人的な意見です。例えば、有名な先生や偉い先生のところにいるスタッフ・大学院生ほど、雑用が多くてなかなか研究に専念できないというケースを見てきました。これでは、いくら大きな予算がついても、それを使う側の体制が整っていないのではないかと感じています。つまり、研究に使用する機器などハード的な環境が改善されても、それを使う若手研究者を取り巻くソフト的な環境が劣悪なのです。これからは、このソフト的な環境を変えていかないと駄目だというのが私の個人的見解です。欧米に比べると日本においては科学者が研究をするための体制が今一つ整っていません。さて、日本における大学のアカデミック・ポジションについてはどうでしょうか。丸山工作先生のもありますように、助手のポストの数は減っていますし、任期制も取り入れられる可能性もあるとのこと。教授、助教授の数は増えているようですが、果たしてその質は向上しているのでしょうか？今のままでは、大学院生が指導を十分に受けられなくなってしまいます。以下は、大学の教職員の任期制に関する私の個人的意見です。任期制を取り入れるにあたって、全ての助手の職を任期制にはいけないと思うのです。画一的なポストを用意するより、状況によってある程度選べるようにした方が良く思うのです。事務的な処理は難しくなるかもしれませんが、それは文部省の問題でしょう。1) 任期制の助手職：サラリー等の待遇をパーマネントの職よりも良いものにする。また科研費申請などの事務的手続きを軽減するなどのメリットを与える。2) パーマネントの助手職：長期的なテーマの研究を行う研究者が就く。現在、日本のポスドクは、一般的にかなり待遇が良く、比較的雑用が少ないので研究するのに恵まれた環境にあるようです。但し、最大3年などのように任期があります。上記の1)の場合、それよりも長い任期(5年程度)で待遇はポスドクとパーマネントの中間くらいにするというのは如何でしょうか？このような措置を取れば、任期制の助手になりたいという研究者も増え、研究者の流動性も増すのではないのでしょうか？そうかといって、長期的な研究をも行えるように、2)というオプションも必要になってくると思っています。

皆さんはどのように思われますか？

おわりに

今回のテーマのような、大学における研究者を取り巻く環境は、分野を問わず科学者一般の問題で、社会問題と言っても過言ではないと思います。私は学生時代から、ある程度こうしたことに関心があり、問題意識として持っていたので、この3ヶ月の間に、イギリスと日本では科学研究における環境が大きく異なることに、気がついたのだと思います。

この違いの背景にはイギリス人と日本人の意識、生活様式などの違いがあると思われる。勿論、イギリスにも多くの問題があります。北アイルランド等の民族問題、高い失業率と高いインフレ率、街を歩けば物乞いもかなりの数います。日本と比べて、決して物質的に豊かとは言えない国かもしれません。でも日本の場合、高度成長期以降、物質的な豊かさを追求するあまり、精神的な豊かさを大事にできなかったのではないのでしょうか。海外にいと良く分かるのです。そうした物質的な豊かさばかりを追求した結果、人間性を歪め、最近神戸で起こったという連続殺人事件、某大手銀行の頭取の汚職・自殺などを引き起こしたのではないのでしょうか。私腹を肥やし、大局観に欠ける政治家、官僚、政治に無関心な若者達、援助交際なるものに走り高価なブランド品を身につけたがるコギャル達、虚脱感が蔓延し夢を失っている人々。日本には言葉で表現することの難しい問題が多くあるようです。偉い人達が考える科学政策における研究費の使い方にも同じことが言えるような気がします。高価な機器を買えば良い研究ができ、ブレークスルーも見つかるかと思っています。何かもっと大切なことを忘れてるような気がします。

私が気がついたもう一つの大きな違いは、イギリスは個人主義の国、日本は集団主義の国だということです。言い換えれば、イギリスは集団の中にあっても個人、個性の生きる国、日本は没個人、個性の国ということです。身近なことでは、日本の研究室ではよくお昼とか一緒に連れ立って食べに行きますが、そういう習慣がこちらにはあまりないようです。皆好きな時に食べているよう

なのです。また、イギリスでは、小 学校の生徒は親が送り迎えして、小学生だけで集団登下校することがないとか。日本ほど安全な国ではないにせよ、集団で登下校させて、大人が1人か2人当番で送るといった合理的な方法もあると思うのですが、個人々々で送り迎えしているようです。初等教育から個人主義が浸透しているのかもしれませんが。例えば、日本の学校では、黒板の前で先生がマスプロ的、画一的な授業をするのが一般的ですが、イギリスでは1学級の児童数も日本より少ないらしく、学校によっては、個別指導とまでいかないまでもグループ別指導ができる体制もあるそうです。イギリスでは今、初等教育での児童の算数のレベルが低いことが問題になっているそうですが、個性を育てるという面では優れた教育なのかもしれません。科学者に必要な独創性も育つ土壌があるのかもしれませんが。また、個人主義の国だからといって、集団で行動する際にまとまらない訳でもないのです。協調性もちゃんとあるようです。先日、生化若手のOGに「ライフサイエンス研究開発基本計画」(案)の「ライフサイエンス計画の意見募集」という件で意見を求められたので、意見を送ったところ、彼女が私の意見をライフサイエンス課の担当に渡したら、「いろいろ、団体関係からはコメントをもらっているが、個人からの意見は、第1号です。いったいどなたでしょうか。」と言われたそうです。(私自身は匿名にしています。)如何に日本では、集団主義がまかり通っているかが分かります。皆で渡れば恐くないものなのでしょう。団体、企業などの裏付けがないと意見としての要件を満たしていないのでしょうか?匿名での投書、抗議を平気でやるのも日本くらいではないでしょうか。情けないことですが、自分個人の意見を発表する自信、勇気、根性がないのかもしれませんがね。

現在、生化若手OB(現在30代位の研究者、上記の科技庁の役人等を中心としてます)のメーリングリストでも、「日本における科学研究費の使い方が悪い」ということに関する議論が白熱化しています。

海外にいと、どうしても日本の研究環境の弊害に気づいてしまうのでしょうか、フランス在住のOBが、日本における研究費の使い方が悪くて、お金のいる所には集中しすぎて無駄になっているので、お金の使い方を考え直そうという意見が出たことから、議論が始まりました。このOBの方の意見では、余った研究費を返す制度を作れないかということでした。研究の最大の推進力となる人材、意欲を活性化するためにも、若い学生さんたちに奨学金を出すべく、お金の使い方を考え直そうという意見ですが、全く同感です。ただ、研究費を政府に返すには、逆に煩雑な事務処理やお金がかかってしまう現在の行政制度では、難しいのではないかと私は意見しました。また上記のOBの意見に対して、テキサス在住のやはり、生化若手のOB、三品裕司博士によれば、次善の策は、日本での単年度会計をもっとフレキシブルにすることだとのことでした。つまり余った会計を、次年度に繰り越せるようにすれば、もっと柔軟に予算を使えるようになるということです。また、三品博士の意見では、本来研究費というのは、研究者が時間と能力を使って勝ち取ったものだから、研究遂行のために何に使っても他人に構って欲しくないし、「いらぬ金は返す」ことになったら、必要なお金まで返さなければならなくなるとのことでした。そこで、上記のフランス在住のOBは、科学研究費も近年巨額になっているのに、その無駄が大きいから、この無駄をやめて必要なお金に回せば、日本に散在する小さな研究室の研究者、大学院生が何年も研究を続けられるとおっしゃっていました。確かに、大学院生の奨学金などを扱う機関を作って、そういうところに余った予算を還元すれば、多少煩雑な事務処理も無駄なことではなくなると私も発言しました。各研究者も余った予算で、何をかうか年度末に思案しなくても済みます。これに対して、また三品博士のご意見では、余ったお金といらぬお金は本質的には違うもので、本来は余ったお金で拡大再生産をすべきものなのに、それが出来ない。研究費でそれが出来ない理由は、研究費に期限と用途の制限がついているからで、この制限をなくすべきだとのことでした。更に、余った予算のことを議論する前に、予算の配分法の改善を考えるべきだとのことでした。(これには、勿論大学院生への給与も含まれます。)我々の議論に対して、今度は日本の理研の養王田博士(やはり生化若手のOB)が入ってきて、少なくとも日本では「研究費は研究者が時間と能力を使って勝ち取った」というのは部分的に誤りで、「研究費の総額」は、役所、役人に対する評価だという意見も出てきました。しかし、役所が企画するプロジェクトというのは、本来、様々なアイデアを比較検討して、スクリーニングに残ったものをプロジェクト化しなければいけないのに、そのスクリーニングを十分に行わずに立案されているとのことでした。.....まだまだ、この議論は続いています。

この議論についてもっと詳細を知りたい方は、下記のホームページをご覧ください。但し、認証名とパスワードが必要なので、ご連絡頂ければお教え致します。

<http://bio-net.or.jp/aybc/oband/ml.html>

このようにメーリングリストを使えば、日本以外の国、アメリカ、イギリス、フランスにいても、お互いに科学技術政策について自由に意見を交換できるのです。私たちが、夏の学校やセンター事務局を運営していた頃はまだメールも普及しておらず、電話、FAXや手紙だけで連絡を取り合っていたので、会の運営だけで手一杯だった記憶があります。従って、年1回の夏の学校でしか全国の会員が集まって意見を交わす機会もありませんでした。でも今は、メーリングリスト、ホームページもあるので、普段から互いの意見を交わすのはかなり自由に出来るはずですよ。たとえ間違っているから、自分の意見を公の場でも言えるようになって頂きたいと思います。人によって、異なった意見を持っているのは、当たり前のことなのです。意見を交わすことで、互いの視野も広がることでしょう。

私がこの会に入った頃は、もうこういった話を議論することはありませんでしたが、昔はオーバードクター問題や女性研究者問題を扱う小委員会もあったようです。上記の、三品博士の時代には、センターの活動で、自衛隊の戦闘機を一機買うのを止めると日本全国の大学院生に給料を支払えるという試算をしたことがあったそうです。私自身もイギリスでこのように学んだことを基に、帰国したら研究だけでなく、日本の研究環境における諸問題に取り組んでいきたいと思っています。それから、会員の皆さんには、科学技術立国日本の経済活動を根底で支えているのは、我々科学者なんだという誇りも忘れずに、毎日の研究に励んで頂きたいと存じます。

最後になりましたが、この原稿をBTTに掲載するにあたりご協力頂いた、夏の学校事務局長の東京大学大学院理学系研究科、刀根佳子さん、同じく副事務局長の東京大学大学院農学生命科学研究科、小川哲弘さん、BTT担当の富山県立大学生物工学研究センター、元平佳作さんに深く感謝致します。また、イギリス留学に際し、ご協力頂きました内藤記念科学振興財団、サントリー生物有機科学研究所中嶋暉躬所長、アトムテクノロジー研究体の丸山瑛一先生、岡田孝夫先生に深く感謝いたします。

追伸： ご意見、ご感想がありましたら、

E-mail n.nagano@biochem.ucl.ac.uk

までご連絡頂ければ幸いです。



[フロントページに戻る](#)